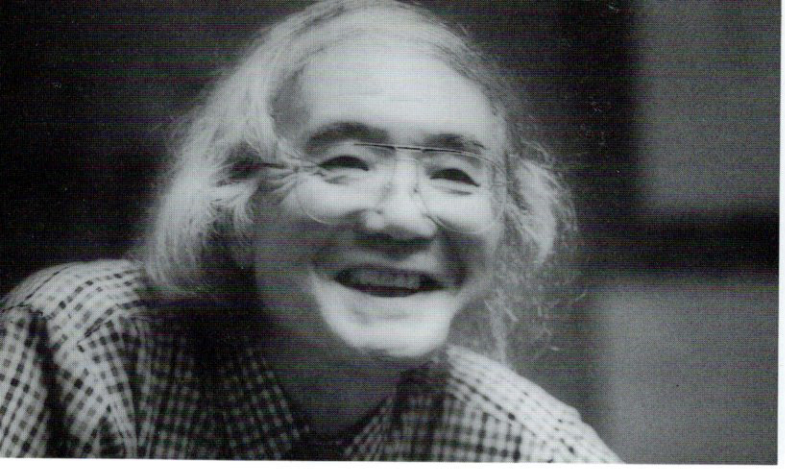


対談

自由な気風 自由な精神

佐藤 章・高橋克彦両氏母校を語る

1996・8・21／盛岡・弥まもとにて

母校はていていと聳える巨木であり、そこへの愛惜は永遠である。詩人の佐藤章さんと作家の高橋克彦さんに、豊かな精神を育んでくれた母校のことどもを語ってもらった。対談ではそれぞれの時代を映しながら教師との出会いや校風、文学への目覚め、文学館の秘話、母校に託すことなどを縦横に話し合った。佐藤さんはくめども尽きぬ母校の源泉と未来を愛しみ、高橋さんは見守ってくれている後輩たちを自らの励みとしていた。

文学の原点は演劇部

佐藤 高橋さんの文学の原点は、いつ頃に始まるのですか。

高橋 やはり岩手中学・岩手高校の演劇部にいた頃です。演劇部に入らなければ、こういう文芸の道に入ることはなかったと思います。小学校の頃は、ほとんど文芸に興味はもっていなかった。

たまたま中学校一年の時に誘われて演劇部に入った。そのうえ、運良くというか、上級生がすぐにいなくなっちゃいましてね。中学一年の時、なぜか僕らの学年で二十人位が演劇部に入りました。当時は中学二年と三年がいなくて、高校一年に二人いるというだけの演劇部。入部して間もなく、高校一年の先輩が二人とも退学になったんですよ。何でかわからないけど。（笑）だから中学校二年になった途端に、中学校二年生しかいない演劇部。それで急に演劇部活動というのを自分たちが中心となってやらなければいけない状況においこまれ、僕も台本を書く必要にせまられました。中学二年の時から卒業のあたりまで五年程の間、台本を書いた。そうしてものを書く喜びみたいなものをずいぶん教えられたんです。

岩手高校で学んだことには、もちろんいろんなことがあるんでしょうけれど、直接今の人生に関わっているもので一番大きいのは、やはり演劇部です。

演劇と文芸の伝統

佐藤 昭和二五年卒業の私は、新制高校になって戦後第二回目の卒業生です。戦後、私ばかりではありませんけれど、みんなが活字文化に飢えていました。高校生時代からポール・ヴァレリーや小林秀雄を読むとか、生意気なことをやっていました。墨で消された学校の教科書などに対する反発

※1「テアトル・ド・ディマンシュ」
戦後昭和二〇年代に盛岡二高の教諭だった加藤英夫氏は数年前「戦後岩手の学生演劇」―テアトル・ド・ディマンシュの足跡と共に―という記録誌を編・著で出版している。
それによれば昭和二五年の三月五日にNHK盛岡放送局から東北六県ラジオドラマコンクールに入賞作品の「むらさき」を放送、その作者は加藤英夫、演出台博見（旧18回生）、キャストには台の妹台容子、スタッフに川村洋一（新2回生）の名がある。
また昭和三〇年二月一二日放送の東北・北海道放送劇コンクール

というものがあったかもしれません。

当時の岩手高校もそういう状況でしたが、一年先輩の台さん（台博見・旧18回生）が演劇をやっていたのを覚えています。同級生には長谷部敏一という優秀な人がいて、岩手日報社の文芸誌『東北文庫』に小説が入選。また、国語の水原一（はじめ）先生の小説も同誌に入選と、二人は憧れの的でした。

私は高校二年生の時、演劇部に入り、高校では初めてという自立劇団を作ったんですよ、一回で駄目になりましたけど…。『エトランゼ』と命名した劇団で、内丸の岩手県公会堂ホールで公演。演劇部の先生が角掛忠夫というユニークな人で、台本・演出は先生と私による二本立て。角掛先生からの影響は大きかった。

高橋　それでは岩手高校という学校は、本当にいろんなことをしていたんですね。

僕らが演劇をやり始めた頃―僕は昭和二二年生まれですから、佐藤さんが卒業してから生まれましたけれど―、在学中にそういう話だけを聞かされていたんですよ。当時、岩手高校の演劇部には前校長の西在家寛さんもたまに関わっていましたが、顧問の先生が「伝統ある演劇部を守らなきゃいかん」といった感じで本気で指導してくれていたんです。でも結果的には、高校を卒業して三年後に演劇部は潰れました。だから僕が在籍したのは演劇部の最後の頃。在籍時、顧問の先生には先輩連中がいかに活躍したか、台本は岩手高校の伝統で部員がずっと書いてきたということを教えられたものです。

佐藤　テアトル・デ・マンシュ[※1]というフランスのモリエールを主にやる劇団には、台博見さんや川村洋一[※2]さん、上田浩司さんや私も入っていました。岩手高校は、戦後の高校演劇のリーダーでしたよ。後輩には、のちに中央で活躍した劇作家の秋浜悟史さんがいました。

高橋　その当時、演劇が盛んだったのは、学生たちの志が高かったためですか。

佐藤　文学への飢えが先でしたが、志も次第に高まっていきました。

校長だった山中順三先生は英語の先生でしたが、当時の私は全然英語の勉強をせずにフランス語を独習していた。先生には「英語を勉強しないなら好きなようにやれ」といわれたような印象があります。それでも山中先生には、卒業してずいぶん時間が経った、つい数年前まで時々電話をいただいたりしています。

山中先生は懐が深い人柄だったのでしょうね。後年、私がフランスに行く時にはヴェルレーヌの伝記を「オレの大切な原書だけれど、おまえにやる」とおっしゃり、本をくれました。今でもその本は大切な財産として持っています。

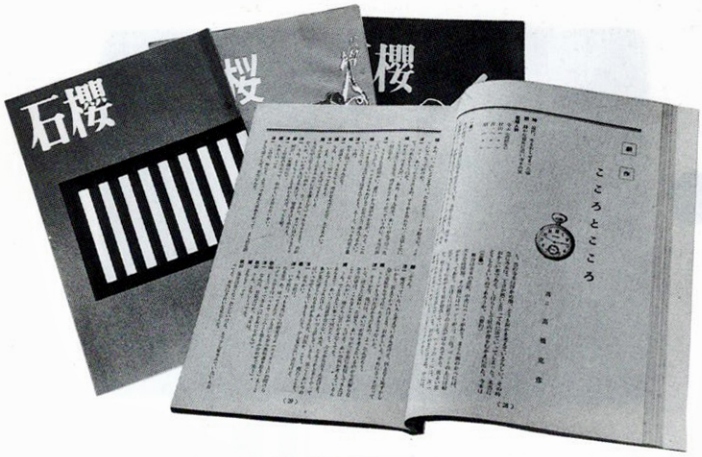
高橋　僕も山中先生には可愛がられ、お宅には、しょっちゅう呼ばれていました。やっぱり先生も小説好きだったから僕がお宅に呼ばれたんでしょう。

僕は『石桜』に、毎回のように作文や読書感想文みたいなものを載せていたんです[※3]。それで校長室に呼ばれ「遊びに来い」と言われ、書斎にまで招かれて、いろんな話を聞いたおぼえがあります。僕は山中先生の授業を受けたことがないけれど、中学校あたりから山中校長先生にはなぜか可愛がってもらいました。

それにしても、佐藤さんが岩手高校におられた時代は羨ましいですよね。

僕が岩手高校に入った時代は、いわゆる団塊の世代で一番子供の多かった時代ですからね。一学年のクラスも五十人ずつ四クラスだった。急に岩手高校がいわゆる進学校のような形になって、岩手高校の気風というものが急速になくなっていった。

僕が入学した当時の岩手中学は伝統的な気風を割と受け継いでいたのに、高校に入ると下小路中学校や上田中学校などから新しい仲間がたくさん入ってくるようになり、学



参加作品「薄れゆく騒音」は第一位で文部大臣賞を受賞、この原作・脚本は台博見であり、戦後の学生演劇のはしりを石桜OBが担ったといえる。台博見は後年毎日新聞東京本社学生部長で死去した。

※2川村洋一は岩手高校在学中から演劇部で、卒業後は小谷剛の「作家」同人として詩作を続け、横賀市で海運業の会社を経営、日本現代詩歌文学館の郷土への設立に尽力し、また文学館運営審議会長として活躍。平成七年一一月没。

※3高橋克彦氏は岩手中・高の在学中、生徒会誌「石桜」に3編の原稿を寄せている。

中二のときはデュマ原作「三銃士」の読後感を、高一では熊谷隆幸君と共作で「民話をたずねて」その一〝沢内甚句の物語〟を、高二では創作脚本「こころとこころ」である。

生数が三倍から四倍に増えた。高校に入ってからは、岩手高校の個性的なイメージが急に失われ、授業そのものも進学校の体制に変わりました。その意味で言うと僕の世代は、岩手中学校から上がった連中と、他の中学校から上がった連中の岩手高校に対するイメージに相当差があった時代だと思います。

佐藤　私が岩手高校にいた時代を振り返ると、校友会雑誌や今も続いている『石桜新聞』は思い出です。自分でもわけのわからないような哲学論文などを書いたこともありました。

高橋　僕は『石桜新聞』に戯曲を一回掲載しています。それから中学校一年の時、生意気にも連載を始めた。一回で挫折したけど。（笑）『民話を訪ねて』というタイトルで沢内甚句の謎に迫るみたいな事を書いた。その予告を見ると、第二回目は青森県にある〝キリストの墓を見に行く〟。それが話題になったのは、ここ三十年位のことです。

僕が中学校の頃といえば、もう四十年近く前。あらためて読みかえしてみて、ほとんどそんなことは話題にもなっていない頃だったと思うのに「ずっと昔からそんなものに興味を持っていたんだな」と、自分でも驚きました。

佐藤　それも今では高橋さんを知るための貴重な資料ですね。

高橋　中学校一年の時ですからね。

佐藤　私は、『二十歳のエチュード』を残して自殺した有名な原口統三にかぶれて、『石桜』に論文を発表したことがあります。ランボオやボードレールのような詩を書く、生意気な文学少年だった。

高橋　文芸部もあったんですか。

佐藤　ありましたよ。

高橋　僕の時には文芸部は潰れていましたし、弁論部というのも消えていた。

弁論部は僕が復活させて三年ぐらい続き、またなくなりました。僕の高校時代は文化系の部がほとんど全滅しかけていた時期です。

ユニークな先生たち

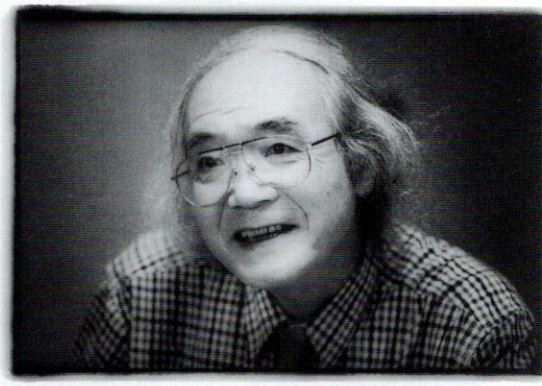
佐藤　高橋さんは、高校時代にヨーロッパを訪問なさったと聞いています。どんないきさつでヨーロッパを訪問することになったのですか。

高橋　演劇部に入っていた高校二年のその頃、部長だったんです。部活動に熱中し過ぎてましてね。ある意味でバンカラの名残なんでしょうけれど『演劇をやっている人間は真面目ではいかん』という風潮があり、演劇をやっているのに勉強するのはどうも格好が悪かった。それで絶対、友達の前では勉強していることを見せないようにしていました。当然、成績は落ちる。高校一年の頃、十番あるいは二十番以内に入っていたんですが、わずか一年で百七十番台になり、さすがに「困ったな」と思っていました。

医者だった親父の跡をつぐつもりでいたのですが、「このまんま、岩手高校でビリのほうにいたら、医者の学校に行けるわけがないな」と思い始めていたその頃、東京の大学に入っていた従兄弟が、一年大学を休学してヨーロッパに行きたいと、たまたま僕の親父に借金に来た。その従兄弟の話を脇で聞いているうち、自分でも何かのきっかけで人生を変えなければいけないという感じがして、親父に恐る恐る「オレもヨーロッパに行きたい」と切り出したんです。親父は従兄弟に金を貸しても戻ってこないと思っていたらしくて、自分の息子に金を懸けるなら我慢できるということだったと思います。

親父が「学校に相談して、先生が良いと言ったらヨーロッパへ行くのもいいだろう」と言うので、僕は翌日、当時の担任で日本史を教えていた大野元先生に「オレは一年間休学して、ヨーロッパに行ってきたい」と話した。先生はふ

〝反逆精神〟を培う●



佐藤　章

さとう　あきら

（新２回生）

岩手県立図書館、毎日新聞社盛岡支局、同北上通信部勤務のあと、日本現代詩歌文学館振興会副会長、同運営審議会副会長、現在同館振興会事務局長。日本フランス語フランス文学会員を経て、日本ペンクラブ会員。北上市在住。

たつ返事。「このままこんなところにいてもしょうがねえもんなあ」と。（笑）大野先生も、私の成績を悩んでくれていたんですね。（笑）それでヨーロッパ行きが急きょ決まりました。

あの時、大野先生がふたつ返事で賛成してくださらなければ、ヨーロッパへ行くことがどうなったか、わかりません。そこでいろいろ説教なんかされていたら、旅行をやめていたかも。

岩手高校在学中、授業については記憶にほとんど残っていないんだけれど、授業以外のことでいろんなことを先生から教えられました。特に大野先生は、日本史を教えていたから当然だったろうけど、文学の基本的なことを、それとなく教えてくださったのかもしれません。

たとえば日本史の授業中、歌舞伎十八番が出てくると、先生はわざと「高橋、おまえは芝居をやっているんだから歌舞伎十八番くらい、全部言えるよな」なんて言う。高校生だから知らなくてもいいのですけれど、知らないために僕はすごく恥ずかしい思いをした。先生は「そんなことをやっていて、書くだけが芝居じゃないんだ。キチンと歴史を勉強しないと劇作家にはなれないぞ」ということを、大勢の前で言う。僕は「頑張らなければいけない」と思うことができました。

意地悪くではなく、当たり前のことを知らない恥ずかしさみたいなものを教えてくれる先生が多かった。その意味で、岩手高校ではいい先生に巡り合ったといえますね。

佐藤　小笠原哲治という絵の先生がいましたね。町の隅や山のどこかでスケッチしている姿は今でも脳裏に刻まれています。

高橋　僕らの時には変わった先生をはじめ、偉い先生がいた。生物を教えていた小山眞一郎先生とか…。『課外授業』と言って僕らを外へ連れ出してくれて、道端で生きているカタツムリを食って見せたりしてね。ああいう先生、今はいませんよ。（笑）そういう先生が当時は多かったです。歌人で、ご高齢だった武田彩吉先生にも可愛がっていただきました。あの先生は授業中、啄木の初版本なんかを持ってきて見せてくれたり、簡単に回し読みさせてくれたんですよね。あの当時は当たり前だと思っていたけど、今思えばユニークな先生がいましたよね。

その当時に比べても無意味なんでしょうが、たまに今の岩手高校に用事があってうかがうことがあります。すると若い先生ばかり。若い生徒たちと同世代だから、いろんなことでは教えられるんだろうと思うけど、僕らの頃には本当に年配の先生がいたんですよね。

そういう人たちから学んだことが、今になってみると確実に自分の中に生きている。同世代の先生も当時、もちろんたくさんいましたが、友達関係になって学校は楽しくなっても、その先生たちから何を学んだかというと、それほど残っていない。教育というのは、そういうものかなぁと思います。

佐藤　演劇部の先生には、生徒といっしょに酒を飲んだという人もいました。「芝居が上がったし、一杯やるか」と。私などタバコを吸っていました。（笑）当時の生徒は先生と裸のつきあいだった。

高橋　柴内興宗先生や日野岳浩先生といったユニークな先生もいましたね。日野岳先生は弁論部の顧問でした。

●創作の原点は演劇部

高橋克彦

たかはし　かつひこ

（新19回生）

早大商学部卒、アレン短大講師。昭和58年「写楽殺人事件」で江戸川乱歩賞、昭和61年「総門谷」で吉川英治文学新人賞、昭和62年「北斎殺人事件」で推理作家協会賞、平成４年「緋い記憶」で第106回直木賞、平成５年ＮＨＫ大河ドラマ「炎立つ」原作執筆。日本推理作家協会、日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員。

校風を変えた進学競争の時代

高橋　ここ何十年かは大学が最終学歴となるのが当たり前になってしまい、高校もひとつの過程になってしまいましたものね。僕らより十年位前は、たとえば大学に行く前、高校をいかに大事に過ごすかというのがポイントでしたよね。それがやはり大きいのかな。本当に高校が通過点みたいになってしまったところがあります。

佐藤　高校時代は一番大事な時期ですよね。何でも記憶できるし、吸収できる。昭和二五年卒の我々の時代、まだ進学は盛んではなかった。なかなか大学に行けない時代でした。

高橋　岩手中学・岩手高校というのは、その頃まだ、どちらかというと進学だけを優先するのではないタイプの、良い学校だったんでしょう。

佐藤　本当に良い学校だった。県立とは比べようのない自由な気風が良かったのでしょう。小学校の時、私は「盛岡一高に入れ」と先生に言われましたが、兄貴が入っていたこともあり、同じ岩手中学を選びました。今思えば、岩手中学・高校の自由な精神を育む土壌は、かえって良かった。感受性の鋭い時期、思う存分にさせてもらったという気がします。そういうところに自分の原点があるのかなと思う時がありますね。

高橋　佐藤さんが在籍した時代をはじめ、僕よりも上の世代の卒業生たちとお会いするといつも感じるのは、「自分は岩手中学・岩手高校を卒業した」と、誇りを持って口になさる方が多いということです。

僕らの頃からは屈折した人も増えてきていて…僕は中学から行ったから全然屈折してないんですけど。（笑）僕の同級生の多くには「一高の受験に失敗して岩手高校にきちゃった」といった気持ちがどこかにあるんです。

だから素直に「岩手高校の卒業生なんだ」ということを口にしない奴が増えた。それがちょっと悲しいですね。記念誌にこんなことを言ってもしょうがないですけど。（笑）

滅茶苦茶に面白い学校ではあったんだけれど、中学から高校へ進学した時点で様変わりした気がしましたね。

「面白い先生」というのは、中学の時はすごく身近に感じるんですが、高校に入っていろんな学生が他から入学してクラスが多くなると、その先生の個性まで死んでしまった気がした。

それこそ池口先生も、中学時代は授業もぜんぜん教えないで、図書館にいる人だった。僕も図書館に割と行っていたから、授業をさぼって池口先生と何だかんだ話していたけれど、高校になるとそういう事もできなくなるというか…。

岩手中学は僕が高校三年のあたりの時期、ガクッと入学者が少なくなりました。一学年を一クラスしか作れないほどになった時期もあったんですよ。岩手中学と岩手高校の伝統がちょうど僕のあたりで途絶えちゃったんじゃないかと想像しますね。

佐藤　今は、他のほとんどの高校も「進学、進学」という状況ですからね。

岩手高校と現代詩歌文学館

佐藤　私が現在たずさわっている北上の日本現代詩歌文学館では、開館七年を機に総合ガイドブックを出しました。全国規模で詩歌資料を総合的に集めることからスタートし、

収集した資料は三五万点ほど。もちろん現在、日本にひとつしかない文学館で、国会図書館からも問い合わせがくるほど評価されています。

しかし、資料などがあっても、最終的にはいかに言葉を愛し崇敬するかの問題。若い人たちがたとえば詩歌の伝統を今後どうつないでいくのか、これからの大きな課題です。

高橋　岩手高校の卒業生だと、村上昭夫さんがおられますね。村上さんとは在校中の同世代なんですか。

佐藤　ええ。村上さんは私より三つぐらい年上で、いっしょに同人詩誌もやりました。

高橋　その時期の岩手高校は、本当の黄金時代ですね。村上昭夫さんの詩集が出て大騒ぎになった頃、初めて本気になって詩を読みました。

あの時、「こういう人が岩手高校の卒業生なんだな」と、大変嬉しかった。学校というものを意識することは、その時までほとんどなかっただけに、そういう先輩がいることはありがたかった。

現在、岩手高校に通っている子供たちが、かつての村上さんの存在を喜んだように、自分の仕事をちゃんと見てくれているかも、と思えば、すごくやり甲斐があります。そのわりに、街で岩手高校の生徒に声をかけられることはありませんが…。（笑）

佐藤　村上さんのような詩人が岩手高校から誕生することになった始まりの時期に、私の同期で川村洋一（故人・新3回生）さんという経済人で詩人でもあった男の存在がある。

岩手高校は、池口杜孝先生が校長になる前の時代から学校図書館として評判が良かった。それが現代詩専門の文学館をスタートさせる話のきっかけになりました。

「岩手高校には充実している図書館がある。その母校の図書館と提携して、現代詩専門の文学館を作ろう」と、川村さんと話したのが始まりです。岩手高校の図書館脇に文学館を建てるのは実現がなかなか大変で地元で動く人間がいなければならない。

そこで「君のいる北上市に建ててもらうよう、運動してくれないか」と川村さんから私に話がありました。民間の人たちが協力する形が理想的なので、公立で北上市に建ててもらうよう運動してくれということになり、当時毎日新聞の記者だった私が斉藤市長にしつこく懇願し、市長の決断を得てスタートしました。運が良かったんでしょうね。ちょうど北上市は昭和五九年が市制三〇周年記念の年。市長の考えは「文学館建設を市制三〇周年記念事業に位置付けよう」と固まり、小学館や集英社、全国からの資金援助がありました。小学館の当時の社長・相賀徹夫さんには全面的に協力してもらい、井上靖・山本健吉両先生の協力もあって、お蔭様でここまできました。

現代詩歌文学館については、まず発想が岩手高校から始まったのは真実。それから全国初の詩歌文学館に発展したわけです。

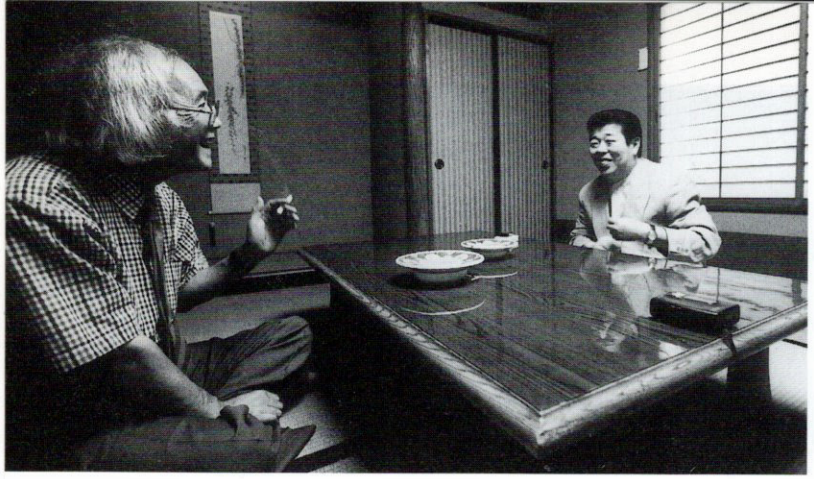
高橋　それでは現代詩歌文学館が建つ場所は、最初は北上でなくても良かったわけですね。もしかしたら、現代詩歌文学館は岩手高校に建っていたのかもしれないわけだ。岩手高校の敷地の中に文学館ができていたらと思うとちょっと残念ですね。なぜ北上に文学館が建ったのか、よくわかりました。

それにしても、岩手高校の先輩方は頑張っているんですね…と、言うと何だか後輩の人たちには悪いけれど。そういうエネルギーが今の若い世代に引き継がれていない。不思議な感じがしますね。

佐藤　私たちの高校時代は、進学の勉強をしないで本ばっかり読んでいたようなものでしたけどね。

盛岡で仕事する格好良さ

佐藤　浮世絵の研究に入られたことに、素地はあったので



すか。

高橋　父親が医者の傍ら美術好きで、今の第一書店の後にあった『盛岡画廊』のオーナーをしていました。実際的には上田浩司さんが仕切っていて、毎日のように画廊に出入りしているうち、僕は浮世絵の見方を知った。上田さんの個人的なたくさんの資料が事務室に飾られていました。そこで触れたのが大きいですね。

佐藤　上田さんには、日本現代詩歌文学館を建てる時、舟越保武のモニュメントを頼んだり、山本健吉文学碑を建てるなど、いろいろお世話になりました。

高橋　上田さんという人を僕は目標にしていました。美術の世界を見たり、物書きになっていろんな人に会います。たとえば、池田満寿夫さんに会って「出身は盛岡です」と言えば、池田さんは「盛岡には上田さんがいますよね」とおっしゃる。体が震えますよ。「上田さんという人は小さな画廊にいても、いろんなところに文化を発信していたんだな」ということを改めて確認させられる。

佐藤　上田さんは顔が広いし、信頼されるんじゃないかな。人柄も絵描きさんを魅き付ける。母校人脈はありがたい。

高橋　上田さんのような仕事をしていることへの羨ましさが、あるいは僕が盛岡に残り続けたひとつの理由かもしれません。都会で仕事をするよりも、地方にいて文化を発信できることのほうが格好いい。

　佐藤さんや上田さんの世代と、僕らの世代との決定的な違いは、岩手高校の卒業生の動向です。地元に残っているのは、商店を継いだ人というのが多くなった。

佐藤　たしかにさまざまな仕事につくよりも経済人が増えたようです。

高橋　それがつまらないとは言いませんが、もっといろんな仕事につく人が増えてもいい気がするんですけどね。

岩手高校の存在意義

高橋　今は意識的に東北という自分が生れ育った場所へのこだわりのようなことを、ここ数年の間、ずっと書いています。特に『炎立つ』から明確に意識されてきました。自分の生まれた土地が何だったのかという思いがすごく強くなってきた。特に、東北には中央から差別されてきた思いのようなものが今も引き継がれ、僕らにとって知らず知らずコンプレックスを持たせることになったのではないか。それで蝦夷（えみし）の屈辱の歴史みたいなものを意図的に書こうとしているんです。今、ＰＨＰ発行の雑誌『歴史街道』に『風の陣』というタイトルで、伊治呰麻呂（いじのあざまろ）という人が歴史上で最初に陸奥守（むつのかみ）を攻め滅ぼしたという、『呰麻呂の乱』をテーマに書いています。それとは別の小説『天を衝く』では、九戸政実の乱を扱っています。豊臣秀吉が全国制覇した後もただひとり反旗を翻したという二戸の武将の話です。そして、来年から新聞で阿弓流為（アテルイ）の話を連載します。『炎立つ』で奥州藤原氏を書き、呰麻呂を書いて九戸政実を書き、阿弓流為を書けば東北の古代史四部作となり、今の我々のルーツみたいなものが解明できるのではないかと。

　岩手に生れ育った限り「どうせやるんだったら…」という思いに突き動かされてきました。これも僕が盛岡に生まれ育ち、今も地元に暮らしていなければ、ひょっとすると書かなかったテーマでしょう。東京とかどこかへ移っていたら、もっと違う物語を考えたと思います。

　その意味では、地元に暮らしているありがたさを感じます。

佐藤　私は、きだみのるという作家と会って、晩年の七年間、いっしょに行動したことがあります。きださんはフランスで一八年ぐらいを過ごした学者でもあり、有名な自由人。教えられたことも多い。

自分のいるところが一番大事なんだということがひとつ。「自分の足元から学ぶことが一番だ、それが最秀の仕事だ」ということで、きださんには「新聞記者としてのおまえは東京本社なんかに行くな。おまえが出身の岩手県を勉強しろ」と諭され、岩手県だけを歩きました。きださんは「岩手の人間はどうも中央に対して劣等感を持っている。何も東京だけが中心ではない。自分のいるところを中心と思えばいいのだ」と言われました。きださんのそういう論理的な精神に私も気づき、劣等感など持つ必要はないんだと教えられた。

自分にとってそういう反逆精神というのが仕事の上で支えになっている。

高橋　文学の場合は特にそうだと思うんですが、何かに立ち向かうとか、コンプレックスを持っていないと多分、良い仕事はできない。これは小説以外にも生活全般に当てはまることだと僕は思っています。

こんなことを言うと、岩手高校が怒るかもしれないけれど、一高がライバル校としてあったために、ある意味での反逆精神を在学中から植え付けられたんですよ。ライバルの一高には現役の頃、進学率などでも常に勝てない。それで僕なんかは、別のところで頑張らなければと思うようになりました。岩手高校にいたって、ちゃんと学ぶべきことはいくらでもあるんだということを、僕なんかは知らず知らず教え込まれたように感じますよ。これが一高を卒業していたなら、そういうコンプレックスを持ち得ていたかどうか。

以前、岩手高校で講演をした時、現役の生徒たちに「岩高は良い。コンプレックスを作ってくれる」と言ったら、あまり受けませんでしたね。（笑）現実に学校へ通っている子供たちにとってはキツい話だったようです。

佐藤さんの中にある反逆精神というのも、岩手中学・岩手高校時代に育まれたものではないのですか。

佐藤　反逆的なコンプレックスは夢の実現の基にもなっている。「辛い時もあるけど、オレには反逆心もあるし、困難に直面してもオレにだってやれるんじゃないか」と思うとか。結局、自分らしい生き方を強く行っていくことにもなる。

高橋　その意味で言うと、現在もちゃんと頑張ってくれている岩手高校に対して失礼な言い方になるかもしれないけれど、昔の岩手高校の伝統というものを取り戻してもらいたいなあという気持ちがあるんです。

進学校となってしまってから、卒業生の我々から見ると、岩手高校の存在理由というのが薄れてしまった気がしてしょうがない。現実に今、学校に通っている子供たちは、そう思っていないかもしれませんが…。

佐藤　大学に入ってコンプレックスに気づいた時、進学に徹せられることで高校時代に熟成できたはずの実は、発芽が遅れる気がします。「大事な時期はやっぱりあの時代だったんじゃないか」と振り返ることになる。

高橋　「岩手高校が通過点の学校になってしまっては、生徒が可哀相だなあ」と思います。その意味で言うと、岩手高校がこの記念誌をきっかけに、良き伝統を取り戻してもらえたら、と願いますね。

僕は講演会で「どんなに小さな村にも必ず歴史があるから、その歴史を教えて行かなければならない。それが村を変えていく一番の原動力になるんだ」と話しています。僕らも今の岩手高校在学中の学生たちも、岩手中学・岩手高校がどういう歴史のある学校だったのかを知る必要があるのではないでしょうか。そこから自分たちの自己変革の弾みのようなものが生まれてくるのではないか。

岩手高校が「卒業してしまえば無縁だ」という学校にはなってほしくない気がします。

佐藤　「卒業してからが大事」というのが母校だと思います。伝統と革新は豊かな伏流水のようなもの。大河石桜精神がとうとうと流れるように、みんなで源泉と未来、母校人脈を大事にして頑張りましょう。